琉球大学学術リポジトリ

乳牛の繁殖の状況と改善策

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-07-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡嘉敷, 綏宝, Tokashiki, Suiho
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21064

乳牛の繁殖の現状と改善策

はじめに

沖縄の乳牛飼養頭数も 1,000頭を越し，畜産業の一部門を形成するまでに発展したことは喜こぶべきことである。最近本土の県並みという言葉がよく使われるが，乳牛頭数を比較した場合，沖縄は未だ1桁足りない状態で，もっと積極的に増殖させる必要がある。増殖策としては生産能率を向上せしめる手段を講ずることである。以下主な問題点について述べてみたい。

1、妊否の状況

1965年9月那覇及び南部地区の主として多頭飼育されている乳牛285頭の繁殖調査を行なった。それによると飼育牛285頭中妊娠牛は130頭で45.6%を示している。又空胎では病的空胎が49頭で17.7%の高率となっており，その他の空胎も40頭で14.0%を示している。ここで「その他の空胎」とは生殖器に異常を認めないが，種付しても不受胎のものをいう。この両方で30%を占めているので，これを解消すれば受胎率は著るしく向上することになる。

2、繁殖障害牛の病状

繁殖障害牛49頭の内，もっとも多いのは卵巣機能減退で23頭（46.9%），次に多いのが子宮内膜炎の13頭（26.6%）である。この両方で繁殖障害牛の7割を占めている。卵巣機能減退は主として飼育管理の失宜が誘因になるもので，乳牛を繋ぎどうしで運動を抑制し，それに加えて粗飼料の給与不足と連続的な搾乳によって栄養状態のよくない牛に多く見られる。その外に暑熱の影響もあるように思われる。症状としては無発情や微弱発情となる。一方子宮内膜炎は難産，後産停滞時に子宮内に細菌の侵入によって起るのが多く，又人工授精時に精液の処理や器具の取扱いの不備から細菌を持ちこむこともありうる。ところでこれらの疾病は飼養管理の改善，ホルモン療法，抗生物質の子宮内注入などで割合治癒しやすいので再び繁殖に供用することが出来る。問題があるのは技術陣の診療組織の不備のため，これらの牛は放置されていたり，或は肉用として屠殺される状況にある。

3、人工授精の奨励

1965年9月の調査における妊娠牛130頭について人工授精と自然交配の成績を比較すると次表の

妊娠成立までに要した種付回数（1965年9月）

人工授精

区分 / 地区別	妊娠頭数	授精回数 1	2	3	4	5～	不明	平均
那覇	22	6	7	6	0	1	2	2.4
南部	43	14	17	6	2	0	4	1.9
計	65	20	24	12	2	1	6	
%	100	30.8	36.9	18.5	3.1	1.5	9.2	2.1

自然交配

区分 / 地区別	妊娠頭数	種付回数 1	2	3	4	5～	不明	平均
那覇	15	11	4	0			0	1.3
南部	50	25	3	1			21	1.2
計	65	36	7	1			21	1.2
%	100	55.4	10.8	1.5			32.3	

注）同一牛で自然交配と人工授精の両方行なったものは、妊娠した方の種付回数のみを数えた。

如くである。本表によると妊娠頭数は各65頭で同数である。又妊娠成立までに要した種付回数は人工授精が平均2.1回，自然交配が1.2回で，自然交配の方が優っている。ところで人工授精も3回までには86.2%が妊娠しているので悪い成績とはみられないが，ただ1回目の30.8%は低すぎると思う。その理由は明かにされてないが，私は次のように推測している。

(1) 沖縄の乳牛は運動不足のため一般に発情の発現度が弱い。そのため子宮運動も弱くなるし，又子宮頸管粘液の精子受容性もそうよくないと思われる。

(2) 種雄牛のある個体には精子の受精能力が低いのがいるように思われる。

(3) 通信網の不備から適期授精がなされない場合があるように思われる。

以上の3点を改善することによって人工授精による受胎率は一段と向上すると思うで，畜主としては人工授精する直前に発情牛に若干の運動をさせるだけでも効果があると思う。事実自然交配にあっては雌牛を雄牛のところまで歩行させるのが多いので，子宮の条件もよくなるとみられる。

人工授精は品種の改良を促進する最良の手段である。 日本における乳牛の人工授精の 普及率は99%（昭和38年）を示しており，沖縄も速かに人工，自然の混用から脱して人工授精の普及に努めるべきである。

4、子牛の育成

沖縄の乳牛は本土から妊娠牛を導入する程度しか増えないようにも思われる。勿論生産された子牛は繁殖に供用されるわけであるが，廃用される成牛があまりにも多いからである。又生産された子牛の半数が 自然交配によって 生れたとみた場合，その資質は決して良いとはいえず，このことは将来の酪農経営を左右する重大な問題を含んでいる。日本における搾乳牛1頭当り年間平均乳量は昭和39年に 4,940*kg*（27石余）となっており，乳牛の資質が著るしく向上していることを示している。沖縄の乳牛の平均乳量は日本の乳量には到底及ばないとは思うが， 酪農家が 優良子牛の生産，育成ということに意を注げば，近い将来その効果は現われると思う。

5、飼養管理の改善

沖縄の牛舎は開放的なものが多く，従って通風がよいので夏季高温から牛を保護するには適している。しかしあまり粗放的なため，飼槽，給水器は殆んどなく，粗飼料はコンクリート床に投下されるので飼料の損失が多い。又欲しい時に水が飲めない。飼育牛は前述したように繋ぎどうしになっており，そのため全般的に体形が悪い。特に肩の附着のゆるいもの，蹄の伸びすぎがめだつ。又頸部は頸綱がくいこんで皮膚の損傷しているものがある。頸綱はこのような欠点があるのでスタンチョンの方がよいと思う。

糞尿の処理にはどこの酪農家も手を焼いているようだが，これは牧草畑の少い経営上の欠陥からきていると思う。採草は殆んど原野や軍用地にたよっているが，この草刈りに要する時間が一番大きいように思われる。これらの採草地が将来とも草の給源地として使用出来るとは保障できないので，或程度の牧草畑の確保は是非必要である。

蹄が伸びすぎて蹄壁が欠損している

多　頭　飼　育

ミルカーは10頭以上の多頭飼育をしているところでは殆んど使用しており，省力管理がなされている。ミルカーの使用は4頭以上の場合は経済的に有利だといわれているので，次第に普及するものと思われる。

以上繁殖調査の概要を述べたが，牛乳の需要は将来増加の傾向にあり，乳牛の増殖は緊急を要する。しかしただ数だけ殖せばよいというのではなく，よい資質の乳牛を増殖して安定した経営を営むよう酪農家の努力を望みたい。

（渡嘉敷　綏宝）